

## 「ヨーロッパ諸国の力関係を 風刺した絵地図」

個人蔵

本図は「滑稽欧亜外交地図」と題され、1904（明治37）年3月に刊行された。時はあたかも日露戦争の開戦直後であり、ロシアを表す黒蛸の巨大さと8本の足（腕 arms）の行方に筆者の風刺が込められている。なお、案は小原喜三郎（慶応義塾大学生）、校閲は中村進午（対露強硬論を説いた法学者）と記され、日本漫画資料館所蔵のものによれば、発行者は西田助太郎（木版書画の版下業者）となっている。

動物をモチーフにして、列強の力関係を風刺する手法は近代のヨーロッパでは珍しくない。だが、それまで熊に擬せられることの多かったロシアを黒蛸に見立てて、その南下政策を風刺した絵地図としては、おそらく1870年にオランダで刊行された「滑稽な戦争地図」が最初であろう。また、1877年にはそれとほとんど同じ絵地図がイギリスの風刺画家フレッド＝ローズにより描かれ、サンフランシスコ・ニューズレター誌に掲載されている（「真面目で滑稽な戦争地図」）。

『社会科 中学生の歴史』に掲載の絵地図（以下、本図）が、それを模したものであることは、

全体の構図、蛸の描き方、さらには蛸の足にからめとられる国々を当地の歴史や文化と関連づけて擬人化する手法から見て、疑いようがない。それほどに両者は酷似している。異なっているのは蛸の足の及ぶ範囲だけである。ヨーロッパ産の絵地図では北・東ヨーロッパと中東に限られるのに対し、本図ではそれらに加えて南アジアから極東まで範囲を拡大している。つまり、本図の左半分は完全なコピーに近く、その手法を応用して右半分を補ったものと考えられる。その点で、漫画史的価値は必ずしも高いとはいえないが、日露戦争期の日本人のロシア観や世界情勢の認識を知るうえで興味深い史料となっている。

では、蛸の足に着目しつつ、当時のユーラシアの力関係を東から順に見てみよう。まず、向かって一番右の足は満州を縦断して清の左腕を巻きこみながら、旅順口に向かう。ロシアが清から敷設権を獲得し着工した東清鉄道を指すのはいうまでもない。これに平服の朝鮮はおとなしく背を向けているが、軍服の日本は銃を発砲している。二番目の足は英領インドにさえぎられながらチベットの腕を掴んでいる（ロシアの進出を恐れた英軍はチベットに侵攻シラサを占領）。三番目の足はペルシアの首に（イランも英露の緩衝地帯化した）、四番目の足はトルコの足にそれぞれ巻きつき、五番目の足はクリミア半島を扼している。さらに六番目の足はトルコ領内のバルカン諸国を押さえながら、地中海

へと伸びている。近代のロシアは不凍港を求めて南下政策を展開したが、その最大の矛先が“瀕死の病人”と称されたトルコ（オスマン帝国）であった。また七番目の足はポーランド、八番目の足はフィンランドにそれぞれ巻きついて絞め殺している。ロシアの支配からの独立や自治を求めて圧殺されたことの表象であろう。西方では、フランスと対立するドイツが東方の安全を確保しようとロシアを必死に押しつけ、また日英同盟を結んでロシアに対抗するイギリスは銃を構えるものの発射にまで至っていない。

また、本図には、英語の説明が左に付されている。参考までに邦訳してみよう。

「黒蛸」はある著名なイギリス人（フレッド＝ローズを指す：原田）により新たにロシアに与えられた名前である。黒蛸は大変強欲で、8本の腕を全ての方向に伸ばし、触れたものは何でも掴み取る。ただ、あまりに強欲なことが禍して、時に小魚によっても傷を負う。当に“大欲は無欲に似たり”という日本の諺の通りである。我々日本人は現在の戦争の原因について多く語る必要はない。黒蛸の存在が更に増すかどうかはこの戦争に係っているとだけ言っておこう。日本艦隊はすでに実質的に東洋におけるロシアの海軍力を全滅させ、陸軍も朝鮮と満州でロシアに顕著な勝利を収めようとしている。サンクトペテルブルクは…いつ？待て、そして見よ。醜い黒蛸！日本万歳！万歳！」

（兵庫教育大学教授 原田智仁）